

聖書：ルツ記 2：1～23

説教題：主の翼の下に

日時：2015年5月10日

1章でナオミという女性が厳しい中に置かれたことを私たちは見ました。突然の飢饉でモアブの地に避難したところ、そこでまず一家の大黒柱、愛する伴侶を失います。その悲しみを癒すべく、二人の息子たちにそれぞれ妻を迎えますが、その息子たちもほどなくして死んでしまいます。こうしてナオミは異邦人の地で肉親すべてに先立たれ、一人取り残されたのです。彼女がどんなに深い心の痛みを覚えていたかは、1章の様々な彼女の言葉に表されていました。しかし同時に私たちがそこで見たのは、そのような中で信仰を投げ捨てなかったナオミの姿です。悲しみを率直に表現しつつも、なお神に信頼を置き続けて、優しい言葉を嫁たちに語り続けた彼女。その姿に導かれてモアブ人ルツが彼女に付いて来ました。こうしてベツレヘムに戻って来た彼女たちに主の奇しい導きが始まって行きます。

まずルツは食べ物を得るため、落ち穂拾いに行かせて下さいとナオミに願い出ます。この落ち穂拾いは貧しい人々の救済手段として、律法に定められていました。レビ記 19章9～10節：「あなたがたの土地の収穫を刈り入れるときは、畑の隅々まで刈ってはならない。あなたの収穫の落ち穂を集めてはならない。またあなたのぶどう畑の実を取り尽くしてはならない。あなたのぶどう畑の落ちた実を集めてはならない。貧しい者と在留異国人のために、それらを残しておかなければならない。わたしはあなたがたの神、主である。」これは土地の真の所有者は神ご自身であり、神ご自身が弱い者、貧しい者を憐れむ神であられることに基礎を置いているものです。しかしイスラエル人がみな、この律法を守っていたかという、そうではなかったようです。聖書にも、人々がやもめや貧しい人々をしいたげたと非難されているところがたびたび出て来ます。しかもルツは外国の女性です。そんな彼女が落ち穂拾いに行っても、22節にありますように、いじめられ、ひどく扱われることも十分考えられます。2節のルツの言葉、「私に親切にしてくださる方のあとについて落ち穂を拾い集めたい」という言葉も、彼女がある種の困難を覚悟していたことを示しているでしょう。

こうして出かけて行ったルツは、「はからずも」ボアズの畑で落ち穂拾いを始めます。このボアズという人は、ナオミの夫エリメレクの親戚で、有力者でした。畑を持ち、人を雇っているところから見ても裕福な人であったことが分かります。そんな畑にルツははからずもやって来た。聖書はこのことがいかにも「偶然に」起こったかのよう

に書いていますが、これは主の隠れた御手によるということ、はっきり書かないことによって逆に浮き彫りにしようとするものでしょう。

4節にはさらに「ちょうどそのとき、ボアズはベツレヘムからやって来た」と記されます。ルツがたまたまボアズの畑で落ち穂拾いをしていたちょうどその時、ボアズもたまたま作業の様子を見るためにここへやって来た！偶然に偶然が重なったかのようです。さてこのボアズはどんな人だったのでしょうか。ある人物が物語に登場して来る際の最初の言葉は、その人を端的に紹介する役割を持っています。そのボアズの最初の言葉は刈る者たちに対する「主があなたがたとともにおられますように。」というものでした。そして人々からも「主があなたを祝福されますように」との言葉が返って来ます。ここにまず私たちはボアズを良い光のもとで紹介されるわけです。有力者だからと言ってふんぞり返っている人ではなく、主との正しい関係に歩んでいる敬虔なイスラエル人であったことを知らされるのです。ボアズはそこに見覚えのない女性を認めて、これは誰の娘かと問います。そして若者から「あれは、ナオミといっしょにモアブの野から帰って来たモアブの娘です。」との答えを受けます。11節にあるように、ボアズはナオミとモアブの娘と一緒にこの地にやって来たこと、ナオミの夫もモアブの娘の夫もすでに死んでしまったことを聞いていました。一言で言って、困難にある人々です。ボアズはそのことを知って、世話のかかる人が来たとか、私の畑に来るなんて運が悪いなどとは考えませんでした。彼は優しくルツに語りかけます。8～9節：「ボアズはルツに言った。『娘さん。よく聞きなさい。ほかの畑に落ち穂を拾いに行ったり、ここから出て行ったりしてはいけません。私のところの若い女たちのそばを離れないで、ここにいなさい。刈り取っている畑を見つけて、あとについて行きなさい。私は若者たちに、あなたのじゃまをしてはならないと、きつく命じておきました。のどが渴いたら、水がめのところへ行って、若者たちの汲んだのを飲みなさい。』」

一方でボアズがこのように関わったのは、ルツの態度と無関係ではなかったでしょう。彼はこのモアブの娘がいかにナオミを思いやって一緒に生活しているかというニュースも聞いていました。11節で彼は「あなたの夫がなくなってから、あなたがしゅうとめにしたことを、私はすっかり聞いています。」と言っています。またこの時も、朝から今まで家で休みもせず、ずっと立ち働いていました。ボアズはそんなルツの姿を心に留めて、12節で「主があなたのしたことに報いてくださるように。」と祈ったのです。箴言 19章 17節：「寄るべのない者に施しをするのは、主に貸すことだ。主がその善行に報いてくださる。」 またイエス様も「あなたがたがこれらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです。」と言われま

した。ボアズはこのような主からの報いがあなたにあるようにと祈ったのです。その際、自分のできることをもって彼女を祝福してあげたいと思ったのです。主が彼女を祝福して下さるための一つの小さな道具となることを願ったのです。

またボアズは主について「あなたがその翼の下に避け所を求めて来たイスラエルの神、主」と述べています。詩篇 17 篇 8 節 9 節：「私を、ひとみのように見守り、御翼の陰に私をかくまってください。私を襲う悪者から。私を取り巻く貪欲な敵から。」 36 篇 7 節：「神よ。あなたの恵みは、なんと尊いことでしょう。人の子らは御翼の陰に身を避けます。」 詩篇 91 篇 1 節から：「いと高さ方の隠れ場に住む者は、全能者の陰に宿る。私は主に申し上げよう。『わが避け所、わがとりで、私の信頼するわが神。』と。・・・主は、ご自分の羽で、あなたをおおわれる。あなたは、その翼の下に身を避ける。主の真実は、大盾であり、とりである。」 いずれも主の力強い守りと、その御翼に信頼する者の安らぎ、静けさ、休息、希望が語られています。ボアズがこのことをルツのために祈ったのは、何よりも彼自身、この主の翼の下で守られて歩む慰めを経験していたからでしょう。富に頼り、社会的権力に頼る彼ではなかったのです。肉の目には見えなくても、主により頼む者の上に広げられている大きな御翼を仰いで、彼は安らぎ、力を得ていたのです。その主の守りと祝福が、あなたにも必ず豊かにあるようにと祈った。

このようなボアズの言葉に接して、ルツは終始謙遜でした。10 節でも 13 節でも、彼女の低い姿勢が示されています。そしてボアズはさらに彼女のために色々取り計らっています。14 節では食事の時に一緒に座らせ、彼自身がホストの役を務めています。また 15 節 16 節では束の間でも穂を拾い集めさせるように、さらには束からわざと穂を抜き落として、彼女がたくさん拾い集めることができるように、とまで指示しています。ある人はこれは随分と優し過ぎるのではないかと言います。そしてこれはボアズがすでにルツに対して恋愛感情を抱いていたからではないか、と言います。しかし私たちはこれを単なるロマンティックな話と見るべきではないと思います。11 節 12 節に示されていますように、ボアズの関心はルツの見た目とか性的魅力ではなく、彼女の信仰者としての誠実な生き方でした。貧しい中でもこのように主に信頼して懸命に生きている彼女に、ボアズは主自らが祝福を与えて下さるようにと祈らずにはいられない。これがスタートです。ボアズはこの章でもそうですし、後の章からも分かりますが、非常に敬虔な人です。そういう信仰者が、主にあって素晴らしい生き方をしている人に好意を持つとしても、それは全く自然なことでしょう。どうして主に真実に生きている人を見て、その姿を美しいと感じない信仰者がいるのでしょうか。ですから

私たちはまず自分が主の前に成長することを何よりも求めるべきでしょう。そのような人こそ多くの人に好かれる真に魅力的な人でしょう。

ルツがナオミのところに帰って来ると、ナオミはびっくりします。考えられない量の大麥がそこにはありました。一体どこで落ち穂を拾い集めたのですかと問い、ボアズという名の人の所ですと聞くと、ナオミは「生きている者にも、死んだ者にも、御恵みを惜しまれない主が、その方を祝福されますように。」と祈ります。「その方は私たちの近親者で、しかも買い戻しの権利のある私たちの親類のひとりです。」と彼女は言います。ナオミは一気に元気を回復します。こうしてナオミとルツはしばらく、十分な食べ物、日々の糧を与えられることになります。しかし話は終わりではありません。なおこれから私たちの想像を超えた主の導きが一層劇的に表されて行くことになるのです。

以上のルツ記 2 章から思わされることは何と言っても、主の奇しい摂理についてでしょう。ルツがはからずも落ち穂を拾い集めた場所は、買い戻しの権利を持つ近親者ボアズの畑でした。また彼女がそこにいたちょうどその時、ボアズ自身がやって来ました。そしてルツはボアズから驚くばかりの好意を受け、ナオミとルツがその日に得た大麥は 1 エパ (23 リットル) ほどもあったと記されています。これらすべては主が導いておられたことであったということを、このルツ記 2 章は、言葉で書かないことによって、一層効果的に私たちに告げています。

そして合わせて心に留めたいことは、このような主の導きは私たちの信仰の取り組みと矛盾しないということです。聖書は主がすべてを支配しておられるから、私たちがどう歩むかは関係ないとは言っていません。主の翼の下に身を避けても、あるいはそうでなくても、主は守って下さるとは言っていません。「主の摂理」という聖書の教えに慰めを覚えることができるのは、主の翼の下に隠れる人のみです。その翼の下に身を避ける人とは、全能の主こそ信頼を置き、自分のなすべきことを一生懸命行なう人です。ルツはすべてを支配しておられるは主であるという、1 章で見たナオミの信仰を受け継いでいましたが、だからと言って何もせずに手をこまねいていたのではなく、むしろ大胆に、一生懸命に働きました。そのような彼女を通して主の奇しい摂理の御手は現わされたのです。そしてこれからはなお一層豊かに現わされて行くのです。

この力強い慰めに満ちた主の御翼が、今日も主に信頼する者たちの上にあることを覚えたいと思います。もし日々の生活が少しでも偶然によって成り立っているなら、私たちの生活は不安と心配で一杯になります。物事は良い方向に進む可能性がある一方、悪い方向に転ぶ可能性もあります。そう思うなら、私たちは絶えず恐れ、心配し、

心が定まらない生活をしなくてはならなくなります。しかし主の大きな御翼を仰ぐなら、私たちの心は定まります。色々なことに気を使うのではなく、ただこの方に一つ心で信頼すれば良いのです。この方が、その翼を広げて私たちを守り、私たちの考えをはるかに超える最善を導いてくださるのです。新しく与えられているこの週にも「偶然」というものはありません。私たちは主の翼を見上げて、その翼の下で主に信頼し、自らのなすべきことを一生懸命行ない、主がくださる奇しい守りと導きの中に生かされたいと思います。また私たちはボアズのように、主の道具となることも求めたいと思います。自分自身が力強い主の翼の下で守られていることに慰められている者として、その主に対する感謝を、他の人へのあわれみのわざに現わして行く。そして主の手足の小さな一部分として用いていただく。そのことを通してご自身の最善の御心を成し遂げてくださる主に、共に導かれ、祝福していただく歩みへ進みたく思います。